

升形本『あい之本』の翻刻と解題

著者	小田 幸子, 井上 愛
出版者	法政大学能楽研究所
雑誌名	能楽研究
巻	45
ページ	167-193
発行年	2021-03-25
URL	http://doi.org/10.15002/00024304

升形本『あい之本』

凡例

一、原本をできるだけ忠実に翻字した。

二、漢字の旧字体は「嶋」など若干を除き新字体に、片仮名のハ・ニ・ミは平仮名に改めた。「夕」は「より」に改めた。

三、濁点、振仮名は原本にあるもののみ採用した。

四、句読点を適宜付した。原本の「。」印は、「マ」ママとした。

五、セリフの引用は「。」とし、引用が連続する場合は、「。」。とした。

六、傍記・補記・注記の類は「（）」に入れて、校訂者の判断により、しかるべき箇所^①に記した。

七、適宜改行した。

八、誤字・宛字・脱字・衍字の処理について

・原本の誤字・宛字はできるだけ原本の形のまま書いて、当該箇所^②に傍線を引いた後、（）内に正しい字を記した。訂正せずに傍線を引いて（ママ）と注記したものもある。誤字なのか宛字なのか判断しにくい場合、そのままにしたものもある。

・脱字があると判断した場合、当該箇所^③に括弧（）に入れて補った。本書は助詞の類を脱していることが多いため、多めに補ってある。

・衍字には当該箇所^④に傍線を引き、括弧内に（衍）と注した。

九、判読不能、訂正箇所について。

①空白↓□空（空白）、抹消↓□抹消、虫損↓□虫損とした。

②校訂者が文字を推測した場合、□（空・○）、□（抹・○）、□（虫・○）とした。

・ミセケチなど判読可能なものは、当該部分に傍線を引いて示した。

・訂正後の字を傍記している場合は、当該箇所^⑤に傍線を引き、

「」内に訂正した字を記入した。

・文字の上に直接訂正している場合は、校訂者が判断して訂正後の字を記した。

③難読で、校訂者が推測した場合は括弧内に推測した文字を記入して□(○?)とし、文字を推測できない場合は□(?)とした。

④表示できない漢字は■で表記した後、()にいて補った。

十、()内に校訂者の注記を付した。

「所作付」所収曲

かも	老松	ゆみ八幡
白楽天	なにわ	高砂
あま	うのは	竹生嶋
ろふたいこ	ぬへ	うかい
八(鉢)木	三井寺	羅生門
今(金)札	あをひ(の)上	矢嶋
自然居士	あしかり	のもり

ゑひら	うかい	あこき
田村	あま	ぬへ
たゝのり	たつた	小塩
井筒	くまさか	ていか
女郎花	にしき、	とをる
うねめ	うき舟	くわうてい
さねもり	源三位	国栖
もみちかり	大江(会)	せつしやう石
せかい	しやり	三輪
道成寺	くろつか	藤戸
百萬	ほうか僧	さねもり
くらま天句(狗)	花月	藤永
かんたん	春永	竹生嶋
はし弁慶	たんふう	ゑほしをり
ふしたいこ	さいきやうざくら	七きおち
とうかんこし	せんじそか	くまてほうくわん
はんごんかう	竹の雪	きふね
けんさい八嶋		

「所作付」

あしかり

〔よのあいしらいの本に有〕

ゑひら

にし木、

田村

よりまさ

くろつか

〔よの□(抹消)本にもあり〕

ほうか僧

藤永

はし弁慶

ふしたいこ

とうかんこし

くまてほうくわん

竹雪

八嶋かたり

せかい のもり

しやり

うねめ

あこき

□□(抹・松風)

とをる

さねもり

うき舟

三わ

道成寺

ふしと

百万

くまてほうくわん 花月

かんたん 春永

ゑほしをり たんふう

さいきやう□(虫・さ)くら

七きをち

せんしそか

はんこんかう

きふね

かも

「かやうに罷出たる物は、かもの明神につかへ申しんしよくの物にて候。それ日本は小国とは申せとも、れいしんあまた地をしめて御座候中にも、当しやの御神は、めくみあらた成御神なれば、さい／＼所々よりも、袖をつらね、くひすをつき、ひ、に御参なされ候へは、しやとうのまへも、事外にきやかに候。そうして神の御事はあさ／＼しくは申さねとも、其神ひうかの国其だけにあまさからせ給ふ。それより、やまとの国かつらきのみねにとびうつり給ふ。又、やましる国、おたきのかも〔に〕とひうつらせ給ひ候て、だんしやう〔に〕かこやひめに〔ち〕きりをこめ給ひ、そぶなつけ給ひ候て、三人の御子をもうけ給ふ。そぶなつけたまひ、なるいかつちの神となり、かも三ところの明神にいわひ申候。かみかもと申候は、ひかけ山を申候。中かもと申は、たけつの御やしるにて候。下かもと申候は、た、すのみやと申候。ちんはいあまた御座候へとも、今月今日は御田うへの御しんはいにて候。それ〔に〕付、承候へは、むろの明神のしんしよく当しやへ、始て御参なされ候間、そうとめ立〔ママ〕をよひいたし、みたをうへ、御目にかけうと存候。よしな長物かたり申よりも、まづ案内申と存。」「かくやへむいて」「いかにそうとめ立へ申候。早々御出あつて、みたをうへ候へ。其分心得候へ／＼。」「さかりはにてかゝるへし。そうとめあふきをひろけてみる」。

「そうとめたちをよびいたす□□(虫・事も)へつの事でもをり

なひ。むろ明神のしんしよく、はしめて参詣なされ候間、みたをうへて御目(に)かけうとの御事にて候。「一段と用(ママ)をしやします」。[まへかたにかみ山をうとうて出てから、うたいすまし、かんぬしともんたい。ゆふ(て)からふたいを一返ま(は)る。かたひらのかたをぬく也。つくほうている。]

「いつもはそれかしがをんとをとりますれども、今日はさうとめたちのをんとか、やう御座ろ」。「いや／＼かれいのことく、かんぬし殿のをんとがやうをしやします」。「かれいとをしやるほとに、さあらは、それかしか、をんとをとりますしやう」。

「むかふへむいて、ゑふりをたて、あふきをひろけて」、「あふき中をつかんで、「さあら／＼／＼」。「まいらせ候／＼其年のねん(ママ)かうは能ねんかうなり、月のかすは十二月、日かずは三百五十八日、春のはしめのたなをろし、すくなく□□(虫・とも)、しろかねのはなさき、こかねのみなり、しやくのほたれ、にしゆんのつふ、此よねをかりとり候へは、町に千[まん]そく、せまちに千そく、いわいをさめてこへをあけ」。

うた／＼ゑひ／＼さうとめ、たうへは(ママ)さうとめ

さうとめ／＼めてたき御田うへに、なわしろにをりたち
かんぬし／＼をりたちて／＼田うへはさうとめ、かさかうてきし
やうそ

女下／＼かさかうてたむならは／＼「な」をもたをは、うよ(ママ)やうよ

かん／＼いかにさうとめ、とびをか山に白たまつはきに花のさい
た(を)みたるか

女／＼かりヤトをかさねて、さいたるぞ、めてたき
かん／＼さつきのさにうほうと、春のうくいすと

女／＼こへくらへん(ママ)しやう、春のうくいすと
かん下／＼さなへとるとて手をとるそおかしき

女下／＼とつたはたいちか、わかい時のならいよ
かん下／＼さなへとる／＼山たのかけひ、もりにけり

女／＼ひくしめなわに、つゆそか、りたる

かん／＼いかにさうとめ、けしやう文かほしいか
女／＼けしやう文をたむならは、さそなうれしからまし

かん／＼けしやう文を□(も?)つたりと、なに、しやうぞ、みめ
わる

女／＼つらにくの「男」め、ゆふた事よ、はらたち
かん／＼まことにはらかたつなら、／＼は、みつか、みを見さしめ

女／＼なはしろの、すみ／＼の水はか、みかは
かん／＼か、みを見たりとも、かを「は」よこれたり

女／＼かをはゑこれたりとも、おもふ人はもつたり
如[かん]／＼いかにさうとめ此国の山／＼に花のさいたるを見た
るか

かん[女]／＼けにきつと見たれば、こかねの花もさいたる
かん／＼を□(虫・う)めてたし

女／＼をうめてたや、けにめて「た」かりける
／＼まことにめて「た」かりける めてたき□□(虫・御田)うへ

うへ(ママ)に、せんしよまんしよのとみふれり／＼
「大夫中人ならば、つくり物はやくとるへし」

老松 よひ出。

高砂 よひ出也。「しやうそく
は、すおふきるへし」。

ゆみ八幡 まつしや。

あま よひ出。「しやうそく
くゝり」。

白楽天 同。

うのは まつしや。

なにわ 同。

竹生嶋 のふ力

「つきん・水衣・しゆす。□(虫・か)きをこしにさし出」。

いろ／＼かたりすましてから、「□□(虫・さて)たから物をお
がませ申」。わき「見よ」とゆふ。「是か当しやのかきて御さ
る」。あふきをひろけて、たいこうちのそはへいて、あふきへ
のせて、是よりあとにしやたんへむいて、□(抹消)とひらをあ
けて、「きり／＼」りやうへとひらをあけておかむ。しゆつを
ふところにいれて出、おかみしもふて、いんのむすぶまねをす
る。たちのあて、「おかましられい」とゆふ。たから物を、爰
にて、「さらはたから物をおかましらりやうか」とゆふ。みな
見せてから岩とび申事の候。此よしをうかかう。さてまひは、
ほうかくをまふへし。

「さて、いんのむすび、しゆす□(お?)かむ時分、くり、かん
きするていに、くちをうこり／＼とうこかす」。

ろふたいこ

わきとつれ立出、ろうよりさきへかしこまつている。はんの事
を、わきゆい付。ろうのはんをする。たちをもつて出る。其た
ちを(ろうの右)わきにをひて、ろうのまへに在る。いろの事
ゆふて、わきへのいて、いかにもきもつふぬて、わきへ此由を
つくる。いかにもけわしく、わきの前出てこける。わきいろ
／＼の事をゆい付て、わきへのあて、「さて／＼さん／＼にし
からりやうとおも(ふ)たか、さほとにのふて、あら心やすや」。
それからがくやの方へむいて、色／＼ゆふ。さて、せいぢの女
出てから、それをつれ、ろうのみきかとより、二尺ほどさきに
をく。「いまの女をひきたて／＼」と、うたいをうとふ時、二
のくにて、女をひきた、(ママ)て、ろうへいる。ろうの右の
ほうへ少よつて、太刀のそりをかやいて、かたきぬのかたをぬ
いて、色／＼ゆふ也。わきしかる。其時いかにも、しを／＼と
してのく。さてたいこを、ち、より下につる。あふきをとりな
をいて、ときをうつ。十うつて、「あすのにさしつこう」とゆ
ふ。よく／＼大夫を(と)ゆいあわせすへし。わきともゆいあわ
せすへし。

ぬへ

これは、「すさきのとうへ」と、おしへ申候。さて後にわ、
かゝりてゆふ也。いろ／＼口伝有。是は、あいあいしらいと申

也。あいをかたるやうには、かたらぬ物也。た物かたり也。

うかい

あいあいしらい、ぬへと同事にかたるへし。是は、「かわさきのみとうへ」と、をしへやる。ぬへと同事也。

八(鉢)木

はやつゝみにて、はしり出る。しやへり。「きいたかゝ」とゆふて出る。色ゝの事をふたいの中にてゆふ。二人つれ立出る。一人は「はらかいたい」とゆふてはいる。一人はふるゝ。かたなさず。二人なから、かたきぬのかたをぬく。二人なから、つへをつき出る。のちに出物と「は」、そはつきさるかたなさいて出る。又三人も出る。三人なからふるゝもあり。はしかゝりにて、ふるゝ。又一人□(虫・は)してはしら二尺ほどさきにてふるゝ。一人は大しんはしらのさきにてふるゝ。むしやを見る物は、にかいとうの物になりて、たちを以持)出る。二人してふるゝ時は、はしかゝりにて。又、一人はふたいてふるゝ。

三井寺

ゆめあわせする物は、太こうちのそはにいる。大夫、ふたいに

て少うたひ有て、しやうめんにて、色ゝ有てからかへる。ゆめ合申物、能時分に出て、はしかゝりにて色ゝゆふて、してはしらさきへ出、ゆめあわせ、のく也。

のふ力、わきとつれ立出て、「扱もゝいつもとは申なから名月しやによつて、今夜の月は扱もゝのとかておもしろい事かな」。「なにとおほしめし候ぞ。〔今夜の月は〕いつもとは申なから名月しやによつて、おもしろい事で御座らぬか。夜長にも御さるほとに、一つきこしめして、なくさましられい」。酒を一つつゝもる。「のふ力」さし御まい候へ」と、わき方よりゆふ。一天しきいなみをもう。まいしもうてから、ほつとたつて、「やあとんゝとゆふは。なんしや、女物くるひかくるう。やれゝ是はみたい事しやか。何としてよかるうぞ。いやゝさりなから、うかゝはざるまいか。いそいて此由を申上と存」。わきのそはへよりて、「いかに申上候。女物くるひかくると申。ちとおなくさみに御ろうせられまいか」。其時かたくきんせいの由ゆう。わきへのいて、「扱ゝ是はみたい事しやか、なにとしてよかるうぞ。それがしは、せがれの時より人のみよと申事はみとむなし、なみそとゆう事はみたいか、なにとしてよかるうぞ。さりなから、女物くるひかくるならば、せはひみちをくつ(ママ)とあけて、こちへくるやうて、こぬやうて、こちへは、な、こひゝ」。あふきをひろけて。

「ふねもこかれていつらん。舟人もこかれいつらん」□(虫・と)ゆうてから、ほつと立て、「やれゝ夜せんの大こしゆにたべやうて、かねをつきわすれた。かねつかう」。「こうゝ」と

二つ三つく。「あふきをとりなをし、つく」。大夫さ、のほに、うしろをたゝく。わきへのいて、「大夫」「なにとてなんし□(虫・は)かねつくぞ」。「おふ中く、それかしかつくこそ道理なれ、此寺のかねつくくほうし」とゆふ。わき方のそはへいて、ゆう。「大夫かねつくへし」とゆう。

「それに御まち候へ」。ほうしへうか、う時、じうたいしをとる。「後に」ほつとたつて、「女物くるい、かねをつかうと申、おつつけ御さつて御らふせられ候へ」、とゆふてのく也。書物をよくみるへし。いろくしな有。

羅生門 つへをつく

「どれにても、しゃへりは、かたきぬのかたをぬき、かたなさす」。

はやつ、みにて、「きいたかく」とゆふて、ふたいを一返まわる。しやうそくは、しゃへり。二人なから色くゆふへし。一人は、「おれもいこく、やとへいこ」とゆふてはいる。後物も、色くゆふて、「おれもいこく」とゆふて、「やとへいこ」とゆふて、はいる也。

今(金)札

はやつ、み。是はとくくと出る。しゃへり也。

あをひ(の)上

しゆしやくるんよひ出、こひ(ママ)聖処へつかいにやる。物のけの事をゆふ。してばしらさきへすこし出て、急ひしり方へ行してはしら内へ少入て、案内の事をゆふ。此ゆう事をふしにてゆふ。わきへ(ママ)出でから、あいしらい、つるくとそはへよつて、「御つかいにさんして候」。ふしにてゆふへし。わき申は、「そも御つかいと、いかなる物ぞ」とゆふ。あ(を)ひの上の事を申。是は、ことはにてゆふ。あとをふしにて申候。わき、してはしら一尺ほと内にいる時、「小ひしりしやうして、まいりて候」と申上候。いろくゆふてのく也。

矢嶋

長はかまにて。其時大こうちのそはに在る。大夫中入して、扱又してはしらのさきへ少出で、しほやをみまい申。わき少もみぬやうに仕候。「しほやのとかあいて、ふしきな事しや」と、ふしんする。「あたりに人もなひが」とゆふ。わきを見付ていろく有。「もうかうを仰らるゝ」とゆふ。与一をかたる時は、わきとよくゆいあわせする。あいのかたり大事で御座る。かけきよとみをのや事をゆふ。「は(な)のさきらつくわ仕候」とゆふ。与一かああ(衍)ふきをいたるところを所望仕候時、かたるへし。

自然居士

かみかゝりには、わきよりさきへふるゝ。又下かゝりには、わき出て、わき上面へなをりてから、ふるゝ。下かゝりは、子ひき立、わきしやうめんから出て、本のところへつれてゆく。かみかゝりには、さきへふれて、こじをよひ出でてのく。わきは、はしかゝりにて、うたいて、子をひきたて、つれてのく。其時、あいしらい、たつ也。

下かゝりにも、かみかゝりにも、小袖よりさきをとをらする。しやうそくは、すをうゝゝりはかまにて、してはしら少さきへ出て、ふるゝ。ふれてから、かくやへむいて、ちよしゆの物参たるよしゆふ。「こじ御出候へ」とゆふ。大夫「ふれて有か」とゆふ。「中ゝふれ申て候。ちよしゆもく(き)せんくんしゆ仕候」とゆふ。大夫出て、しやうきにこしをかける。かくやへいて、おさなき物をつれ出、はしかゝり大めほと、おさなき物出る。小袖ひたりにかけ、ふしゆ左にもたせ、右にあふきもつ。あひしらいより二尺ほどさきへをく。わき、を「さ」なき物をひつたて行。其まゝ、ほつとたつて、みあし、あゆみ、「やるまいぞ」とゆふ。わき「やうが有」とゆう。「やうがあらはつれてゆかふ迄よ。にかゝしゆ事しや」と、わきへのいてゆふ。さて、こしへ此由つくほうてゆふ。こしは、「いつく迄」とゆふ。「天津松本迄参つる間、それかし、をつかけ申さう」とゆふて、ほつとたつて、ゆかふとする。大夫「しはらく」とゆふ。其時下にいる。大夫「それかしゆかう」とゆふ。

「其義ならは、せつほうかむになろうつる」とゆふ。「けうのせつほう是迄」とゆふ時、手かつしやうの内に小袖をとつて、かたへかける。「それかしもあとをくるめうつる〔に〕て候」。をさなき物つれてきてから、ふしゆをあげ、こそてをひろけてをく。小袖よりさきを、わきのとをる也。よく大夫ともわきとも、ゆいあわせする也。

あしかり

たいこうちのそはにいる。「ところの物」とよひ出す。わきの方より、くさかの左(衛)門殿の事をとう。「それは二三ヶ年さきに出られたる」とゆふ。又、太こうちのそはへ行。其□(由?)上ろうにとう。「さゐせん物」とよふ也。出て「なににても、おもしろき物を見せくれよ」とゆふ。そこで、あんして「されは、へちにおもしろ(ろ)き物もなく候か、あしうるをのこの候」由をゆふ。かくやへむいて、「いつものことく、をもしろうあしをうるであしをうられ候へ」ゆふ。又、わきへのいてる。

ゑほしひたゝれの事をゆふ。ゑほしひたゝれきるまに、いろ／＼ゆふて、「左(衛)門殿いそき御出候へ」とゆふてからのく也。

のもり よひ出

ゑひら かたるも有 よひ出も有。女郎花 よひ出。

うかい かたる。□□抹・松風よひ出。同にしきゝ。

あこき よひ出。とをる かたるも有。

又よひ出すも有。

田村 同。うねめ よひ出す。

〔をくに有〕□□抹・さねもりかたるへし。□□抹出

ふるゝ。後にも□□抹・ふるゝ。うき舟 同。

あま よひ出。

くわうてい ゆひをさして、「ちやふん」とゆふてから、

ゆひをさしてかたる。かたりあけてからも、ゆひをさす。又、

「ちやふん／＼」とゆふ也。いろ／＼口伝有。すなはち、のふ

よりさきへ出てかたる。是を物おきとゆふ。

ぬへ かたる。

たゝのり よひ出。

たつた 同。

小塩 同。

井筒 かたる。

くまさか 同。

ていか よひ出。

さねもり 〔わきしやうきへこしをかけて〕。

わきあふきをなをすと出て、ふるゝ。又かたりあけて後に、
「ゆけう上人此所へ御下向候て、さねもりの御あとをおとふら
いなされ候間、みな／＼御参候へ。」とふれ
てのく也。かたるあい也。

源三位 〔かゝりて、見付、かたるへし〕。

国栖

弓と矢と以持出る也。かたきぬのかたをぬく也。又一人は、
やりを以持出る。

もみちかり

女出て、つくり物の右のかとにいる。是持のたちもちよひ出す
時出て、あいしらいてから、又のいてる。さて、まつしや出
てかたる。太刀持て出る。此たちは是持のひたりにをいてから、
「其分心得候へ」とゆふてのく也。

大江(会)

おもては、とびの面がよし。してがた、又惣の物、ふたいをうとうてまはる也。うたいの内に、「たんかう」とゆふ時、惣物うつふき、うなつく也。

せつしやう石

ほつすをかたけて出る。たれをゆい付て出る。わきなすの、はらへつゐてから、してはしら一間程をき、はしか、にて、「ありや／＼」とゆふ。わきか、あいしし(衍)らいをしかる。「さて／＼ふしきな事か御座る。あのかんが一村参と存て御座れ、あの石のそはへ参と存て御されは、ほつたり／＼とをちて御ざす(ママ)ましやう」とゆふ。わき、しかる也。扱、せつしやうせきの事とう。かたる也。

せかい

のふりき、木のゑたになりとも、又竹のゑたになりとも、ふみをゆい付て出る。してはしらのさきへ、一二尺ほど出て、りやうの手に持ち、さきへさきし出、かたる。一返ふたいをまわるゆいあけてから、又まへかとのの(衍)ところにてかたる也。ふれてはいる。

しやり のふりき

「どひらをあけてみせる也」。

まへかとは色／＼ゆふて、あいしらい有て、大こうちのそはにいろ。しやりをとつてはいろと、こけいづる。とこのそはへ、ころり／＼とこけ出。しやりてんを見付、きも「を」けし、さて僧にふしんする。さて、かたる也。

しやりをとつて、してはしらのそはや(ママ)ゆくと其ま、こけ出る也。さてかたりあけてから、しゆ(ず)とり出、しやりてんへむいてしゆすをすり、「南無いたてん／＼」とゆふて、しゆ「ず」をする也。

三輪

其ま、たつ。宮へ参道すから明神いわれかたる。一返まわりてから明神へ付、つくほうておかむ。衣を見付、いかにもふしんそうにみて、かへる。僧方へ参、かたるへし。

道成寺

「二人なからのふ力。一人はわきへこけかゝりて、かねのをちたよしゆふ」。

「たれかある」とゆふて、かねの事を言付也。のふ力二人出、一人あと也。是はさきを持。かねをしゆろうへあけてから、ふ

へふさまへに、してかたはいる。あとは、太こうちのまへにいる。大夫とあいしらい言てから、又たいこうちのそはにいる。かね、をつるよりはやく、「くわはら／＼」と言て、一人はふたいの方へこけ出、一人あとは、はしか／＼り方へこけ出、両方をきあかり、いろ／＼言てから、ふたいしてはしら二尺ほどさきにて、二人なから、はたと行相、わきへのきて、はしか／＼へ行、二人なから色／＼言て、かねをいろうて「あつゐ」とゆふ。み、へをにきる。「われゆけ人ゆけ」とたかいにじきあり。わきの方へはしりか／＼り、かねのをちたる事言。
ま□(？)に、してかた、かねをしゆろうへあけたるやうたい言。女人かたくきんせいの由をゆい付。是わきへのいてふる、也。

くろつか のふ力

わきとつれ立出。ふへふきのまへにいる。大夫、「わらわのねやはし御らん候な」と言て、はしか／＼り、大め程ゆくと、ほつとたつて、してはしらのさきへ少出で、「あるしのねやをなみそと申たることはのすへかふしきな」。此由ほうしへうか、い申。ふへふきのさきにつくほうてゆふ。「申あるしの女しよ(ママ)上らうの身として夜中にたき、をこりにいてられて候が、ことはのすへがふしきに候間、ちと見てまいりましやうか」と言て、ほつとたと、する。わきしかる。此ほつとたと、する。わきのしてによつて、二度する物も有。又三度仕候も有。但ゆいやわせ次第に仕候。わきの方より「扱なんしもそれにてまと

ろみ候へ」と言。其時少まどろむ也。わきのほうへ、しりめづかいして、そつとひぎをたて、たと、／＼する。わきみて、しかる。爰所を二度にても三度にてもゆいやわせ仕候。わきしかる時「かしこまつた」とゆふて、とゝする。又ねる。扱二度ほとすきてから、い□(虫・か)にもそつとのいて、「さて／＼さうくつにあつた事かな。してはしらのさき少出でから色／＼の事言。「あるしのねやをなみそといわれたか、ふしきな事しや。それかしせかれの時よりも人のなみそとゆふ事がみだし、みよとゆふ事がみとむない事しや」。さて、□(戸)ひら少あけてみよとする時、又わきへのいて、はなをふさき、てをあて、／＼「くさい」とゆふ。又ねやをとつくりと見る。はしめ「は」とひらを少あけて、後にはみなあけてみてから、きもをつふいて「こわい事かな。さて／＼、ねやをなみそと申たこそとうりなれ。此由まつ申上」。ゆふて、其ま、そはへはし(り)か／＼りて、こけて、ねやのやうたいゆふ。「いそいてのかしられい」とゆふ也。口伝有。立てゆふ事は二度なり。してはしら少さきへ出、(ママ)しやへるへし。

藤戸 長はかま

「御前に候」○(ママ)そしやうゆい付て「かしこまつて候」。してはしら少さきへ出、「みな／＼承候へ。此嶋の御ぬし、さ、きの三郎殿今日吉日を以、御にうふなされ候間、なににてもそしやうの事候は、罷出申せとの御事にてある間、みな／＼其分

心得候へ〜」。〔ふれてのいてゐる。い所太こう□(虫・ち)きわ〕

「いかにたれか有」。〔御前に候。〕「まつ〜したくへか(へ)し候へ」とゆい付。「かしこまつて候」。〔やらいたはしの事やまつた、しられい。こなたのなけきは尤て御さる。去なからわたくしもなみたをなかにて御さる。まことに鳥るいちくるいたにも、おやこのわかれとかなしみするに、こなたのなけきは尤て御さる。まつしたくへかへらしられい。やあらいたはしい事かな。〕さてまくをおろす迄、はしか、り大めほとまで〔いてからみ〕おくりて、そこにいる。それよりかへる。わきの方へ行て、「た、いまの女を(マ)有様を見て、我等こときの物迄もなみたをなかにて御座る」。是をしてはしら少さ〔き〕にて言てから、此由を申上。「いかに申上候。只今の女をしたくへおくり申て御座る。なんほういたはしき事御座る」。〔しか〜〕此物のあとを(以下脱文あるか)

「うら〜」一七日とむらいの事ゆい付。又、「当うら」ともゆふてんこと同事。くわけんの道具ゆいあける(候?)て「あれを申せとも、是を申せともなるまいとおをせらる。まことにそれかしはぶちやうはう物て御座る程に、尤はやなりますまい。又くわけん過てのちには、おさかもりなどは御さりますまいか。〔有由ゆふ〕」其義で御さるならば、大さかつきを以、五はいも十はいもくたされて、舟そこにとつく(〜)ねまらして、いひきのやくを仕ましやう。〔「一たんと(な)んしにはにやい申て候」。〕「かしこまつて候」。ほつとたつて、「みな〜承候

へ。彼物御あとをくわけんかうを以て御とむらいなされ候間、当うらにをきて一七日か聞せつしやうをもやめられ候へ。くわけんのやくしやも、いかにもきれい(に)出立、早々御出候へ。其分心得候へ〜」。

百萬

「御前に候。いにしへ上(?)はおもしろ事あまた御座候へとも、いまとは、うちたへて御座候間、しやうしんのおなく□□(さみ?)になにかな御目かけ申たい事しや。爰に百万と申て女物くるいの候か、おもしろくるい候間、是を御目かけ申さうつるにて候」。〔ふし、太〕「南無しやかむにむ〜」。〔同〕「南無しやかしやか〜」。〔太〕「南無しやか〜」を四つ五つほとゆふてから、大夫おそく候へは、「なもふた〔同〕〜」。又是三返なりとも五返なりともゆふへし。是はじうたいにいわする也。おなしととかき付たるふん、ひよしをふむ也。ふたいの中ほとにて、「さはみさあ〜」とゆふて、あとへよる。大夫、大つ、みのさきへ、二尺ほとまへにて、さ、のほにてた、く。〔やあはちかさいた〕とゆふ。〔太〕「あらわるのおんとうや。わらはおんとうろう」とゆふ。〔さあらはおんと御とりあろうつる〕とゆふてのく也。

ほうか僧

ともをして、ふへふきのまへに「な」をる。たちを持て出。してはしら(ママ)、してはしらの本より大夫まねく。ほつと立。／「やあ」とゆふて、名みやうしとう。「ほうあれの(ママ)」。大夫、「ひん舟にのせて」ゆふ。「のふ、そなたのなは、なにとゆふぞ」。「ふうんりうすい」とゆふ。して、まひとり、なをと。ふたりの名をとって「舟のせる事はならぬ」「しかく」。「いや、ふうんしやとおもやれ」。して「そなたはなんぞ」。「ママ」「ほうかしや」。して「かのいろくきよくをする物か」。「ママ」「おふ中く」とゆふ。

此由を、のふとしにゆふ。「其義ならはのせい」とゆふ。其時「舟にのりやれ」とゆふ。さて、うちは、色くの物をわきとてをかくる時、「のふ、かなしやのふ」とゆふ。わきにかたなに(ろ)うとする。「ママ」「なにをさわくぞ」と、あいしらい、色くゆふ。「おかしの人の心やく」とうたいをうとふ時、ほつとたつて「そちかをかしけりや、こちもおかしまて。又、「しらは、とはせたいぞ」とゆふ時、「そちかしらにや、こちもしらぬまで」。ゆふてのく也。

さねもり

「下か、り」わき出、大神(ママ)はしらへゆきて、おふきをな

をすと、其ま、立て、ふる、也。又かみか、りには、わきまくの内にいる時出、ふる、也。

扱下か、りも上か、りも、後のしなはお(な)し事。中入有から出、上人ひとり事仰らる、由をゆふて、かゝる。かたりあけて、さねもりのあとをいけのみきわにて御とふらいのよしを、立ふる、也。

くらま天句(狗) のふ力

わきと出、文を持、はしか、りの中ほとにて「西谷の花今を盛にて候間、ちこ若衆立(ママ)を御共なされ、御出あれとの御事にて候。まいろうつる由申候へ」。「かしこまつて候。こなたへ御入候へ」。たいこうちのそはに在る。わきゆい付、「のふ力き(ママ)」「さしまい候へ」。一たしかいなみもふ。まいしまふと、大夫うしろへきている。是を見付て少わきへのいて「やらふしきな事か有。いま、てなかつたか、すみかしらかある。えい、すみかしらかとおもふたれは、すみかしらかとおもふたれは(衍)、客僧かいらる、。此由を急て申上」。「いかに申候。あれにすみかしらかと存て御され、すみかしらではのふて客僧か、つくりとしていらる、。あれをひつたててやりましやう」。「とゆふて、ほつと立」。「いやく此所は源平両家のちまたにて候間、みなく御立候へ」とゆふ。「ひつたて、やりましやう物」。「わき立とあとにて」「さてくにかくしい事かある。ゆるりと酉(酒)をのみ、花などを見物いたいてなくさもふとお

もふたれば、此用様な、さかもりのざしきをさますわこりよのやうな人には、此にしがらをはたはかり、「を」まらせいてな。たちてこふしをにきりゆふ。

又後のあいしらいは、このは天句(狗)になりて、つへをつき、そはつききて出、「きいたか」とゆふ。出で、みな物、けいこに「大しん」はしらときりやうて、一人くはいる也。「しやうなをう殿御出有、兵法を御つかい候へ。其分心得候へく」とゆふ。

「かやうのさかもりのさかもりの(衍)さしきをさまし候間、ひつたて申さう」とゆふて、ほつと立。「みなくかへろう」とゆふ。

花月

わきとつれ立出、太こうちのまへに入。わきよひ出、「おもしろき物を見せてたまはり候へ」。いろくゆうて、かくやへむいてよひ出。大夫してはしら過てから、たつて、「ちしゆのくせまい、こうたをうとふて、なくさましられい」とゆふてからたつて、あふきをひろけて「こしかたより」とあいしらいかうとふ。大夫てをなけかけて、ふたいをまわる。其時してはしらのさきにて、あしひやうし三つ。又めつけはしらに、ひやうし三つ。大しんはしらにて、ひやうし三つふんて、又本の処にて大夫つきたをす。ほつとたつて、「やらは成木には目が有よ。目かとおもへは、うくゑすか。らつくわらうせき仕、つふて、

うちころいてやろ。かたきぬのかたをぬいて弓をいよ」とゆふ。色くゆふてのく。「いにしへのち、の左衛門にて有か、見わすれて有か」とゆふ時、ほつとたつて、いろく有て、かつこをつくるとき、大夫ほされぬ用(様)に色くゆふてのく也。

藤永

「藤永のともをして太刀を以(持)出、其時いろくゆふてのく也」

「のふ力」又なる(お)のともして出、「さらは一さしまい候へ」とゆふ。一天四かいなみをもふ。大夫、しねんこしのくせまいもふ。「りやうとけきしうと申も、此御世よりおこれり」とゆい、しもふと其まゝたつて、「又きみのおからかさを、れうとけきしうとかたけて、我等もともに参けり」とゆふて、まいしまうと、さいみやうしよふ。色くゆふ。此由を藤永殿にゆふ。さいみやうしへ、藤永いのくちうつしにゆう。又わき「いそいてまへ、みやう」とゆふ。其時「をのしは、あまりな事をゆふ物しや。みかま、ならば、此にしからはたちはかりをまらせいてなあ」ゆふ。のく也。

かんとん

女に(い)てたち。そはつききる也。まへのほうを、いとにてとつる。まぐらをた(か)かへ出、ひたりにして「以(持)」、はし

らより少さきへ出て、色くかたる。「まくらをとこのうへ、しやうめんにく」。扱たいこうちのそはへゆ「き」ている。大夫案内をゆふ。「先をこしをめされ候へ」とゆふて、こしをかけさする。大夫よりすこしさきへ出て、つくまいて大夫と色く言てのく。さて、がく過てから、いかにもつがいのぬけぬ用（様）につるく行て、あふきにてゆかをた、いて「いかにたひ人、おひるなり候へ。あわのうく」ご出き候」と言てのく也。

「がく過て、大夫ねるをた、く」。

春永

しやうそくは、かたきぬ。く、りきる也

たか（は）し殿とつれ立出。太刀もつて出、さてわきなをると、わきのひたりのかたにたちをおく也。「いかにたか（ママ）れかある」。「御まへに候」。めしうとの事かたくゆいつける。又たねなを出て、小太郎案内をこう。其時出て、色くつかいをして、わきとたねなをへつかいする。さて太刀かたな、あつかる。それをひたりにもち、又「小太郎がかたなも、をこせい」と言。いかにもぶちやうほうにゆふ。小太郎をこさぬ。其時きつくしかり、かたなをとる。太刀ぬき、せいはいする内（に）はやうちくる。いのちたすかる。其あつかる太刀かたなを、しうたいのまへにをく。わき「いかにたれかある。いそきたちかたなをかへし候へ」とゆふ。「かしこまつた」と言てから、たちかたなをわたしてから「いたはしき事かな」と色くゆふ也。たち

かたな参て、太こうち所（に）たねいる。「たちをまいらせい」とゆふとき、「ゑほしひたれめされ、いそぎ御まいり候へと申候へ」とわきゆい付「る」。其時たちかたなをもち、たねなをにたちをまいらせ候とき、わきのくちうつしにゆふて、さてしてはしらのさきへ出て、いろくめてたき事をゆふてから、「たねなをいそぎ御出候へ」とゆふ。ゑほしひた、れきる内にいろくゆふ也。

竹生嶋

のふ力。らいしやうにて出る

いろくかたり言てから、かきをこしにさし出る。さてしんかへれいをゆふて「たから物をおかませ申さう」とゆふ。わき「みよ」とゆふ。其時「先是か当しまのかきて御さる」。あふきのせてみせる。しやうめんへうしろむいて、しやたんとひらをあげる。「ことくきりく」、りやうへあけて、さておかみてから、しゆず、ふところに入て出、おかみしもうてから、いんをむすふまねをする。たちのいて「さらはおかましられい」とゆふ。さてたから物をみせる。みなことくく「おかませ」から「此所に岩とひと申事の候」。此由をうかかう。さてまいは、ほうかくをまふへし。つめは、「くつさべ。ことく」と言てはいる。はしめにかきをみせてから、とひらをあけて、いんをむすひ、しゆす、五返んも三返んもくり、かんきするていに、くちをうこりうこ（く）とうこかす。さてたから物を見せる也。

はし弁慶 つるめそなり

きよ(う)けんし二人、あひしらい。たいこうちのまへにいる。しやうそくは、つきん・水衣きて、水をけを、わいかけにしてはしり出る。一返んまわる。ふたいの中ほとにてこける。あとのあひしらいは、なになりとも(さ)きのこけたる物をひきたて、いろ／＼ゆふてのく也。二人して、はやつゝみにて出る。いかにもきもをつふいて出る。扱後に「やれ、をれもつれていてくれ。やれ／＼」とゆふてはいるもあり。

たんふう

「わきに太刀あり。しかいをよくかくす也」。
たちをもちていつる。扱、僧よひいたす。わきへとりつきいろ／＼する。僧か人をあやめのく。其後(以後脱文あるか)

ゑほしをり

はしめ出る物は竹馬にのりてふるゝ也。ふたい一返まわる。書物とよく見合る也。三人成共五人なりとも出る也。してかたは、こしに、くしり・ひつしき付て出る。のこぎりもさいて出物も有。のほりはしをかたけて出物も有。ほそひきもちて出物も有。まへかたにはしかゝりに「て」色／＼ゆうて、してかたは、くしりをさいて出、のほりはしにほそひきをゆい付て、ほりをな

けわたし、みな／＼はしをわたる。はしのこをふまへ、はいもてわたる。

わたりすまいて、やしりきり。かべゑ水をかくるまねして、つちをおとし、あとにいる物にやる。其間やしりきるあひた、みな物手まねきする。くしりにて、かべつちをおとす也。ひつしきを下にしき、つちをいるゝ。是を次第／＼にやる。すつる也。ほりにゆきかゝりてから、ほそひきに石をゆい付てなけこむ。ほりのふかさみる也。ほそひきをはしに付□□(抹消て、はしをなけわたす時、はしのはしをふまへてなけわたし。

みな物こしにぬ「す」人の道具さいて出る。扱かたなに、かべしたじ「の竹を」きる。さて、まはしらにゆきあたり、てにてほん(ママ)をとる。是をのこきりにてひききる。いごかいてみる。ひざをなをいて、はしらをひきぬく。てまねきして、あとな物にやる。さてかたなのさきへ、ひつしきのかは(?)をゆい付て、内を人のみる用(様)にして、あちへさし出、こちへさし出で、さてしてはしらのきわにて、とうらんよりひうちつけたけ取出て、火をうつまねして、たいまつに火付、さし出してかた是を取、うちへなけこむ。牛若殿、たちをぬき、いまのたいまつをなけこむ。牛若殿きりとす。たいまつのない用(様)、はしめのをたてゝなける。二のたいまつをひざへなけつく。是をあしにてふみけす。三はんめのたいまつを、おびしより、五すんはかりうへゝ、なけつける。是を牛若殿ひたりの手にてとつて、こちへなけかへす。其時牛若殿、たちのさやにてきやうけんしをきる。「やう(ママ)かなしやう(ママ)」とゆ

ふてふしころひ、こけるを、二人してりやうのてをかたにかけ
てはいる。一人は其物のあしをもち、して、かいてはいる。し
てかたを、□□□(三字充吉)

いろ／＼口伝有。たいまつをもつて出る物もあり。ひうちい
(し)をう(ママ)もつて出る物も有。はしをかたけて出る物も有
ほそひきもつて出物も有。人を、く候は、いかほとも出る也
さて此物とも、ぬす人なれば、ぬす人のなりをして出る。いろ
／＼すきんる也。いろ／＼さま／＼のていをして出る也。の
こきりは、いたにやきはをやき、さいて出る。

ふしたいこ

わきとつれ立、出る。たいこうちのまへにいる。わきのよひい
たす。ゆい付るも有。又ゆい付ぬも有。両のつかいする也。

さいきやうざくら

わきとつれ立。わきよひ出、花見きんせいゆい付る。大夫きて、
あいしら「い」をよひ出、此由わきへゆう。しやうめんの方へ
むいて、とひらをひらく。「こなたへ」とゆうてのく也。

七きおち

わきよひ出、舟を出せとゆう。ふねを大つ、みうちのまへにを

くも有。ふへふきのさきへをく有。大夫とよくゆいやわせする
也。大夫とわきと色／＼言て、かたなにてをかくるとき、わき
の方へてをかけて「しはらく」と言て、いろ／＼しなをしての
く也。

とうかんこし

〔是はしねんこしでし也〕。

わきとつれ立出る。たいこうちの本いる。わきよひ出て「おも
しろき物あらは、みせてたまはれ」と言。がくやへむいて、こ
しをよひ出て、のく也。其ま、一せいうち出す。あいしらい
わぬさきに、つ、みなとうち候へは、きやうけんしよりつ、み
うちへ、はちをあたゆる也。

せんじそか のふ力

ぜんじほうとつれ立出る。た、こ(み)たひ、わきのそはに有。
此上、なこまとうのとひらをひらく。のく也

くまてほうくわん

此間にはなすの与一をかたるへし。

はんごんかう のふ力也

つくり物ふたいのさきな(ママ)中にをく。大夫いて、「やとかる」と言。ていしゆへゆいつく也。後にしかいを(の)事をゆい付る。はしめにふ(た)いに小袖有。いろくかたりをゆうてから小袖を(い)たきて、いかにをもたそうにいたきてはいる。「しがいをおくり申候」と言てから、わき「かうはんを出せ」と言。「心得て候」とゆうてのく。内よりかうはんもつていつる。ふたいの中ほとにをく。大夫とよくゆいやわせする也。

竹の雪

かつらをかけて女にてたち出、たいこうちのまへに在る。わきよひ出、いて、色く言て、大しんはしらの本へゆきて在る。わきは在ると、又月わかをしかる。いろく言てから、きよ(う)けんしをよひ出、ゆい付る。月わかよひにゆく。きたりたるよしゆふ。きたりてからいろくしかり、言てのく也。二人してあいしらしいする也。

きふね

大夫、ふたいのしやうめんにておかみきねんする。てをあわせおかむ。うたいはて、から、たつてかたる。さて大夫下向すると、ふたいの中ほとにてゆきやい、いろく言てから、たいこ

うちのそはへゆきて在る。せいめいよひ出。「御まへ候」と言てたつ。「心得た」と言、がくやへはいる。たんをしやうめんをく。たなの竹のかつ、なに、ても月のかつをく。十二月、又うるいがあれば十三かく。書物とよく見合出也。

けんさい八嶋

「当うらの物」とよひ出、「当浦物」とこたへ申也。

扱も八嶋(の)かせん、けふは日暮ぬる。あすのいくさとさため、ひきしりそく処、をきの方よりも、しんしやうにかさつたる小舟に、十七八のけいせい、やなぎのいつ、かさねに、ちしうのはかまふみく、み、つまぐれないに日(虫損)たるあふきをはさんてさしあけ、くかにむかいてがせ(し)ける。いそきはちかく成しかは、舟をよこにひかへ、是あそはせとそまねきける。ほうくわんことう兵衛さねもとをめされ、「やあ、あれはいかに」と御状(ママ)有。真元うけたまはつて「さん候。あれ(衍)あれはいよとの事にてもや候らん。去ながら、大しやうくん、や(お)もてにす、んで御らんせんところて、たれねろふて、いをとし申さんとのはかり事にてもや(候らん)」と申せは、ほうくわん「扱身方に、いつべき物たれかある」。「さん候。御身方にて、あまた候中にも、下つけの国の住人、なすの太郎助高が子に、与一宗高とて、小ひやうに候へとも手しやうすにて、かけとりなどを仕候に、三つに二つはかならず、いわずせ候」と申せは、ほうくわん「さあらは与一をめせ」とめされ

しに、年比はたちはかりのをのこなるか、かちんにあか地のにしきのひた、れをき、かふとをぬいて、たかひほにかけ、ほうくはんの御前に参る。ほうくはん御らんして「いかに与一。あのけいせいいたてたるあふきのまん中いて、平家に見物させい、与一」。「えい、さん候。いまたかやうのふん物仕たる事も候はす。一しやう仕ろふつるともからにおふせ被□(虫損)ひやうや」と申せは、ほうくわん大きにいかり「今度かまくらをいて、此じんへ共したらんつるさふらい、よしつねがめいをそむくへからす。それにしさいをそんせぬともからは、いそきかまくらへ□(？)、ておかゑりそへ。後日にかまくらにてさた申へし」と、いかりたもふ。与一、じし申あしかりなんと存、「つかまつろうつる事、ふしやうには候へとも、仕てこそみそうらはめ」とほうくはんの御前を罷立。

其比なすの小くろとて、きこうる名馬に、まるはやすつたる金ふくりんのくらしかせ、わか身かるけにゆらりととり、いそへむいてそあゆませける。御前の人々も、只今の若物こそ、一しやう仕ろふつるともからとこそ申されける。ほうくわんもたのもしけにて、みたもふ。

かくて「少」やころとをければ、うみへさつふと打入、馬のふとはらひたすほとこそ見へにける。ころは三月十八日鳥(酉)の一天の事なりしに、折節北風はけしうふき、舟はちいさし、なみは高。ういつしすんつ、うきぬしつみぬ見へければ、あふきも「さ」たかならず。与一めをふさき「南無きみやう八まん、なすはゆうせん大明神。た、いまのあふきのまん中いさせてた

べ。是いそんつる物ならは、弓きりとつてうみに入、このま、しかしい、ふた、ひ本国へかへるへからす。いま一度本国へかへさんとおほしめさは、此矢はつさせた(ま)ふな」とふかくきせいし、とんくり目にひらきみれば、風も少ふきよりは、あふきもいよけにみにける。与一小ひやうといふしやう、十二そく三つふせ、とつてからりとうちつかい、よつひいてはなつ。あやまたすあふきのかなめきは一すんはかり上を、ひふつといきつて、かぶらはうみに入は、あふきはそらにあかり、春風にひとみふたもみもまれ、うみへさつふと入。つまぐれないに日出したるあふきが、白なみのうへにうきぬしつみぬ、「い」つしつんつ、うきぬしつみぬみへければ、た、さなから、こやうのちりうきたるにことならず。平家(に)はふなはたをた、き、「いたりや、おのこ」とかんつれば、源氏にはゑひらをた、き「いたりや、むねたか」とかんつる。ほうくわんあまりのうれしさに「やあ、其与一をおくのまへつれていて、ち、をす(は)せい、えい。しい／＼は(い)／＼はい／＼」とゆうて、馬にのりたる心もちして、かくやへかけはいる也。よく／＼い、合して、いつへからす。

康章

書画(朱印)

「能目録」

〓(斑)女
 黒塚
 自然〔居〕士
 芦荊
 ひつし
 氷室
 愛寿忠信
 安宅
 舟弁慶
 すゝき
 かねもと
 三井寺
 賀茂
 鉢木
 もち月
 しやつきやう
 高砂
 山女〔姥〕
 道明寺
 志賀

野宮
 東北〔岸〕居士
 せいをうほう
 瀧つ田
 兼平
 当麻
 かつらき
 定家
 岩舟
 江ノ嶋
 仏原
 源氏供養
 車僧
 小かち
 大佛供養 をくにも有
 大六天
 めかり
 禅師そか
 さしやう ほうかく
 りやう
 飛雲
 うのまつり
 俊寛
 文字〔覚〕

盛久 難波 天鼓 松風 三輪 とう舟 道成寺 はころも 大佛供養 梅かえ ひはり山 楊貴妃 ほうか僧 舟弁慶 小油(袖)そか ともなが 芭蕉 鶏立田 浦かへ 錦戸 盛久 行家

升形本『あい之本』の翻刻と解題

小田幸子

井上 愛

解題

本稿は、鴻山文庫が所蔵する間狂言伝書、升形本「あい之本」付能目録 二冊（鴻山文庫蔵能楽資料解題 下）第十一章 狂言・五〇 間狂言14）の翻刻である。本書は、流派ならびに成立年代は不詳ながら、江戸初期以前の内容を持つと推測され、まとまった間狂言伝書として、寛永十六年の奥書を有する「大藏虎清間・風流伝書」（同解題 間狂言1。能楽資料叢書1「大藏虎清間・風流伝書」に翻刻と並び、最古の部類に属する。本来無題の書だが、升形の特色ある形態を有することから、升形本「あい之本」と称されてきた。升形の能楽関係伝書は他に類例が無く、古風な印象を与える。全二冊の内訳は、間狂言の所作を記した一冊（所作付）と、能曲名を目録風に記した一冊（能目録）で、二冊を一括して栗色の帙に入れる帙は後補。二冊は内容としては別種だが、原本はともに仮綴で、形態をほぼ同じくし、一体の伝書であったと推測される。翻刻にあたって、あらためて、二冊の書名を升形本『あい之本』とした。区

別が必要な場合は、書名に各々「所作付」、「能目録」を加えて示す。

〔第一冊・所作付〕

一三九cm×一四九cm。袋綴。栗色表紙。左上の薄黄色題簽に「あい之本」と墨書。虫損があり、全体を補修する。原題は無く、表紙と題記は補修後のもの。原題無し。料紙は斐楮交漉紙。墨付五十四丁。片面九行書が基本だが、行数は八十二行まで幅がある。初丁オに「鴻山文庫」の印。終丁ウに「康章書画」の朱印。本文は漢字交じり平仮名書き。補筆は墨書で、本文と同筆。

七十三曲を所収。冒頭（一丁オウ）に三十八番の曲名を目録風に列記するが（うち一番は抹消）、目録と本文の対応関係には乱れがある。すなわち、目録の曲はすべて本文にあるが、逆に本文があるのに目録に記載しない曲が半数近くあること、目録冒頭（あしかり）（よりまき）は本文の順番と一致せず、（三三）以降の順番は本文の順番と一致することなどである。また、〈竹生嶋〉と〈さねもり〉の二番は、重複して記事がある。

内容の大半は、アシライ間を主体とする間狂言型付である。ただし、本文冒頭の「かも」は「田植」（替間「御田」）の詞章、末尾の「八嶋かたり」（本文では「けんさい八嶋」）は「那須与一語」の詞章である。各曲の型付は、書式・記述内容ともにきちんとして整理されたものではなく、精粗が大きい。たとえば、「ゑほしをり」の「ヤジリ切り」のような長大・詳細な記事がある一方、「老松 よひ出」、「ゆみ八幡 まつしや」など、舞台に出る形式や衣装だけを書き出した簡略な条もある。

書式は、上を五字分ほどあけて曲名を書き、行を改めたのち、セリフを適宜引用しながら間の所作をほぼ経過に沿って記述する。曲名下に衣装などを注記することもある。また、終曲まで記述してから、前に戻って追記することもある。曲の変わり目は二行ほどあける。

〈あしかり〉に「よのあいしらいの本に有」と注すること、他にも類似の注記があることから、本書以外にも間狂言伝書が存在した如くであるが、「能目録」がそれに該当するわけではない。他本の存在は知られない。また、流派は不明ながら、「道成寺」は下掛りの型を記述し、「自然居士」と〈さねもり〉は上掛り・下掛りの型を對比させながら記述する。

江戸中期以降に書かれた各種の「型付」のように整った形式をとっていないことは、本書が草稿の類だった可能性を示唆すると同時に、成立の古さの一根拠ともなる。後代の間狂言伝書のような間の役に特化した記述に留まらず、対応するワキの動きやセリフにもしばしば言及しており、舞台進行の全体像が

浮かぶ利点がある。

注意すべきは、〈はんごうかう〉の「つくり物ふたいのさきな（ママ）中にをく」や、〈きふね〉の「たんをしやうめんにをく」（壇を正面に置く）以下、間が作り物の運搬や作成に携わっている点で、後見役が確立する以前の時代状況を反映している。内容的にみても、本舞台の名称がいまだ確定していない状況が察せられ、「橋掛かり大目ほど」「してはしら一尺ほどさき」などと表現する一方、〈竹生嶋〉の「ほうかくをまふ」、「うかい」・〈ぬへ〉の「あいあしらい」など述語化しているものもある。

現在とは異なる演出や古風な演出が記述されているのも、本書の特色であり、貴重な点である。それらの若干については後述したが、ほかにも、〈くわうてい〉の狂言口開けに現在に伝わらない独自のセリフがあり、これらを解明していくことによって、江戸初期の間狂言研究が大いに進展することが期待される。

〔第二冊・能目録〕

一三五 cm × 一三八 cm。仮綴、共表紙。斐楮交漉紙。虫損あり。未補修。全六丁。墨付五丁。奥書ナシ。

六十五番の能曲名を目録風に記す（大仏供養）は重複。うち、五十八番の曲名は第一冊と重ならない。〈愛寿忠信・鈴木・兼元・浦かべ・行家〉などの希曲を含む。

解題の最後に、升形本『あい之本』にみられる時代の古い演出とおぼしき記述を補足としていくつか取り上げたい。

時代の古さを示す演出として、たとえば、『烏帽子折』に、最初に登場する舳レ・六波羅の早打が、源義経を討ち取れと諸国へ舳れる際に「竹馬」に乗って登場し、アイ(盗賊たち)が、家尻切(強盗のため家屋・蔵を破壊をする写実的な演技をすることが挙げられる。アイは、「いろ／＼なずきん」をかぶり「ぬす人のなりをして」舞台に登場する。家尻切の眼目は、くじり(孔をあけるのに用いる錐の一種)、引敷腰当、尻皮、のこぎり、登り梯子、細引といった盗道具を用いて宿に侵入し、牛若丸らに撃退されるまでを演じることで、笑いをとることだったようだ。独立的な場面としても見応えがある。

他にも、『竹雪』に「かつらをかけて女にてたち出」とあり、アイ(継母)が鬘をつけていることが挙げられる。現行曲では『邯鄲』のアイにみられる演出だが、かつて『竹雪』にも用いられていたことがわかる。

また、作り物の演出では、『七騎落』では現行一艘の舟の作り物を用いるところを、当史料では二艘を出していると解釈できること、『放下僧』で舟の作り物を出していることなどが挙げられる。

『橋弁慶』はアイが「つるめそ(最下級の神人。犬神人)」で、現行の替間「弦師」にあたる。左に掲出する。

きよ(う)けんし二人あひしらい。たいこうちのまへにいる
①しやうそくは、つきん・水衣きて、水をけを、わいかけ

にして、はしり出る。一返んまわる。ふたいの中ほとにてこける。あとのあひしらいは、なになりとも(さ)きのこけたる物をひきたて、いろ／＼ゆふてのく也。②二人して、はやつ、みにて出る。いかにもきもをつふいて出る。扱後に「やれ、をれもつれていてくれ。やれ／＼」とゆふてはいるもあり。

(以下、引用の番号・傍線は私に付す)
傍線①で示したようにアイは頭巾・水衣の装束に、水桶をわいかけにする。『七十一番職人歌合』で「つるうり」が、黒漆塗笠をかぶり、覆面し、脇に弦を入れた桶が描かれていることから、本曲のアイも実際の弦師に似た装束にしていることがわかる。^(注4)アイ二人のやり取りは簡略な記述だが、五条大橋で牛若丸が人を斬るさまを見たアイ二人が「きもをつふいて」登場し、一人が転び、もう一人が転んだ男を助け起こして問答となる。なお、川島朋子氏は早打アイとして登場するのを「かなり後になって作られたと考えてよい」として江戸末期と推定しているが、傍線②で示したように、当史料でアイが「はやつ、み」で登場することから、元来の演出と考えてよいだろう。

アイがユーモラスなセリフ・演技をする演出は、『藤戸』(殺生石)にもみられる。『藤戸』ではアイ(佐々木盛綱の下人)が、前シテ(漁師の母親)を送り届けた後、管絃講の酒宴で「大さかつきを以、五はいも十はいもくたされて、舟そこにとつく(て)ねまらして、いひきのやくを仕ましやう」と、自らイビキをかこうというセリフがある。同様の文句は『貞享松井本』にもみられる。

〈殺生石〉のアイ(能力)が、飛ぶ雁が地面に落ちたとワキ(玄翁)に報告する場面で、「あれを以て参まして、はんの(おひじの)おしる晩のお非時のお汁にいたす(ママ)まじやう」とおかしみのあるセリフを言う場合も、物語の展開から逸れて「笑い」をとうとうとしている点で、〈藤戸〉と同様である。^(注7) いずれもセリフ・演出に流動性があつた時代の傾向を反映するもので、現在よりもアイの演技によつて笑いをとつていたことを窺わせる。

〈檀風〉には目を引く記述がある。次に全文を掲出する。

たんふう 「わきに太刀あり。しかいをよくかくす也」
たちをもちていつる。扱、僧よひいたす。わきへとりつき
いろ／＼する。僧か人をあやめのく。其後

〈檀風〉の記述は途中で切れている可能性がある。現行宝生流の展開では、梅若が父の仇・本間三郎を帥の阿闍梨とともに殺害するが、当史料には「僧か人をあやめのく」として梅若について言及がない。傍線で示したように、アイ(太刀持)が本間三郎の死骸を隠す演出がある。本曲は、父子の情愛、日野資朝の刑死、梅若の仇討ちといった緊迫感のある展開が続く劇能だが、そのなかにアイが本間三郎の死骸をどのように隠すか思案する演技が見どころの一つにあつたのかもしれないと想像が膨らませられる。

死体を表す演出には〈反魂香〉がある。〈反魂香〉は、娘が客死したことを知った父が、死者の姿を蘇らせる反魂香を焚くことで、娘の亡霊と再会するという筋立ての番外曲だ。本文を掲げ

る。

①つくり物ふたいのさきな(ママ)中にをく。大夫いて、「やとかる」と言。ていしゆへゆいつく也。後にしかいを(の)事をゆい付る。②はしめにふ(た)いに小袖有。いろ／＼かたりをゆうてから小袖を(い)たきて、いかにをもたそうにいたきてはいる。「しがいをおくり申候」と言てから、わき「③かうはんを出せ」と言。「心得て候」とゆうてのく。内よりかうはんもつていつる。ふたいの中ほとにをく。大夫とよくゆいやわせする也。

アイ(能力)が、傍線①「つくり物」を出し、傍線③「かうはん(香盤)」を置くという記述から、本曲では作り物で父娘が泊まる宿を表し、反魂香を焚く場面で香盤の小道具を用いることがわかる。

目を引くのは傍線②「はしめにふ(た)いに小袖有」と、娘の遺体を小袖で表す演出である。「小袖を(い)たきて、いかにをもたそうにいたきてはいる」と、アイが小袖を遺体として大事に扱うよう演技することを注意喚起している。死体を小袖で表す現行演出は、前述〈檀風〉で刑死した日野資朝の遺体を帥の阿闍梨が弔う場面でも用いられる。いずれも小袖を用いて、遺体を丁重に弔う演出が共通する。ただし、江戸初期成立『間拍子舞』には、娘の死体について、「しか／＼ありて、女しする。爰にて笠をく」と、遺体を笠で表すよう指示している。^(注8) これは〈反魂香〉の文献上の初出が草稿本『歌舞髓脳記』(一四五六年以前成立。原曲名〈不逢森〉で記載)で、江戸初期には番外曲

になったため、実際に舞台上で上演されたかどうかは別として、死体の演出にバリエーションが生まれたためであろう。

最後に「那須与一語」を挙げる。〈矢島(八島)〉には、「与一をかたる時は、わきとよくゆいあわせする。あいのかたり大事で御座る」とし、替間「那須与一語」への言及がある。興味深いのは、当史料には〈現在八嶋〉に注記もなく「那須与一語」を載せ、最後に「馬にのりたる心もちして、かくやへかけはいる也」とあることだ。目次には〈現在八嶋〉にあたる箇所「八嶋かたり」とあるため、当史料の筆者は〈現在八嶋〉の間を「八嶋かたり」と認識していた。さらに、〈熊手判官〉にも「此間にはなすの与一をかたるへし」とあることから、〈矢島〉の替間としてだけでなく、〈現在八嶋〉〈熊手判官〉の間狂言として「那須与一語」が用いられていたことがわかる。〈熊手判官〉の別名が〈現在八嶋〉だった可能性を含めて、「那須与一語」がどのように用いられていたのか、今後の課題としたい。

(注1) 田口和夫「間狂言小論 四(烏帽子折の家尻切)」「能・狂言研究」三弥井書店、一九九七

(注2) 小田幸子「能の舞台装置 作り物の歴史的考察(下)」「(能楽研究) 十三号、一九八八、小田幸子「『放下僧』演出史」(能楽資料センター紀要) 六号、一九八三)

(注3) 現在、「弦師」は和泉流の替間だが、〈夜討曽我〉の大蔵流の替間「大藤内」の大筋と同じである。

(注4) 新日本古典文学大系『七十一番職人歌合 新撰狂歌集 古今夷曲集』(岩波書店、一九九三)。法政大学能楽研究所蔵「和泉流間狂言伝書」

(天保十五年「一八四四識語」橋弁慶ツルシ)には「白キ布ニテアタマヲ包ム。ヒタイヲ包又フク面ノヤウニ目ヨリ下ヘモマワシ、結ヒ留テ、下ヘ廻タル布ヲヒタイエ打上ル」とある。

(注5) 川島朋子「橋弁慶の替間「弦師」とその周辺」(『国語国文』53—1号、一九九九)

(注6) 能楽資料集成『貞享年間大蔵流間狂言本二種』(田口和夫校訂、わんや書店、一九八六)

(注7) 小田幸子「アイ狂言の「笑い」(『鏝仙』三七八号、一九九〇)

(注8) 小田幸子「資料紹介「間拍子舞」の翻刻と解題」(『芸能の科学』二十九号、二〇〇二)

〔付記〕 本翻刻と解題は、野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学術的研究拠点」研究プロジェクト・依頼型共同研究「間狂言資料集成の作成とアイ語りを視点とする夢幻能の再検討」(研究代表者・西村聡)の研究成果の一部である。翻刻は小田と井上が共同で行い、解題の前半は小田が、後半の古演出については井上が執筆した。

末尾ながら、本研究の推進を全面的に御支援くださり、成果の公開を御快くくださった野上記念法政大学能楽研究所に心からお礼申し上げます。